HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ナショナリズムの自己再生産に関する研究 ： コミュニケーション・メディアとしてのネーションの可能性について［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	趙, 瀚雲
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第14418号
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/81292
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Zhao_Hanyun_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：趙　瀚雲

学位論文題名

ナショナリズムの自己再生産に関する研究
―コミュニケーション・メディアとしてのネーションの可能性について―

本論文の目的は、現代（高度）情報社会においてナショナリズム言説が不断に再生産されていくメカニズムを、社会的コミュニケーションの観点から理論的に明らかにすることにある。またそれを通して、従来のナショナリズム研究の読み替えの可能性を提示すると同時に、新たな研究の方向性を探る目的も有する。すなわち、歴史・伝統・文化・宗教・共同体等の実体性（客体性）に基礎を置くナショナリズム概念（＝①実体論的ナショナリズム論）の概観と検証から出発し、新聞・出版等の近代メディアによるコミュニケーション様式がもたらす（想像としての）ナショナリズム空間（＝②コミュニケーション様式としてのナショナリズム論）の分析を経て、自己と他者を差異化し二次観察するオペレーションそのものを駆動原理とするオートポイエーシス・コミュニケーション理論によって捉えられたナショナリズムとその再生産のメカニズム（＝③コミュニケーションとしてのナショナリズム論）を明らかにしようとするものである。

本論文において、この三段階は必ずしも時系列的な発展形態や相互に排他的な関係を意味するものではない。ナショナリズム言説の再生産という現象を、歴史的な変化も含め、統一的・整合的に捉えるための理論的精緻化のフェーズであり、観察方法自体を観察するメタ化の試みでもある。このような意味から、本論文はきわめて抽象度の高い概念規定や理論的操作がなされているが、それはいわば意図されたものであり、不可欠の作業でもある。とはいえ、現実の具体例にも目配りがされており、EU 問題等、特徴的な現象に関する検討も随所に挟み込んでいる。理論的な構造と具体例を照らし合わせることで、その有効性を確認していることも本論文の特徴である。

第 1 章の序論において、本論文の目的、背景、方法、構成等についての説明がなされた後で、第 2 章では、ナショナリズム理論に関する先行研究を概観するとともに、前述した 3 つのフェーズのうち、主に第一段階を明らかにし、理論的に規定していく。先行研究に関しては、近代初期の代表的なナショナリズム論としてのフィヒテ、ルナンの分析から始まり、オズキリムリによる三つのカテゴリー、すなわち原初主義、近代主義、エスノ象徴主義におけるナショナリズム論の特性が検討される。生物学的原初性に始

まり、エスニック集団、言語、習慣等の歴史的な要素、文化的な連帯や象徴、アイデンティティ、近代における機能的な分業と協同、あるいは制度としての国家・政治原理等、それぞれにナショナリズムを規定する個別的、実体的なものが模索され仮定されていることが明らかにされる。すなわち、中核要素として想定できる客体性がナショナリズムを可能にしている、という基本的な論点が抽出される。一方、次の段階を先取りする形で、ビリッグや津田に触れながら、ナショナリズムが現代社会認識のための一つのメディア・フレームをなしていることを確認し、その解明のために、社会的コミュニケーションとそのメディアを基礎とする理論的視点の必要性が強調される。代表例として、大黒の情報社会論を引きながら、主客の構図に支えられているパラダイムから、自己言及的構図を基礎とする（ネットワーク・）パラダイムへの視点の転換が論じられる。この観点から、コミュニケーション・メディア論としてのナショナリズム研究という可能性を開いたベネディクト・アンダーソンの検討へと論は繋げられる。

第 3 章で中心となるのは、アンダーソンのナショナリズム論の再解釈である。『想像の共同体』は基本的には前述の第二フェーズに、すなわち、「コミュニケーション様式としてのナショナリズム」に該当するとされ、出版資本主義に代表される「近代性」と言語の多様性に根差す「宿命性」との相互作用の抽出と、その意義が検討される。結果として、近代性がもたらす水平かつ均質なメディア空間と、死や言語の宿命性によって引かれた境界という二重の条件のもとで、「ネーション」が成立すること、すなわち相互予期が可能なコミュニケーション空間（「自己帰属が予期できる集団」）が、「想像の共同体」であると再解釈される。ただし、この段階でのナショナリズムとしてのコミュニケーション空間は、「ネーション」が匿名ではあるが実体化されているという点において、さらにはコミュニケーション概念が未規定である点において、更なる視点の転換が必要であるとの結論が得られる。第 4 章では、アンダーソンに多大な影響与えたマクルーハンのメディア論とナショナリズム論が中心的テーマとなる。論旨の流れは、アンダーソンにおける宿命性と近代性の相互作用という構図が、マクルーハンにおいては技術と身体の相互作用という構図で先取りされていた点を明らかにし、その一般性・汎用性の確認にある。ただし、アンダーソンにせよ、マクルーハンにせよ、実体としての主客の構造を前提にしており、ナショナリズム言説がコミュニケーション・メディアの次元でなぜ再生産されるのか、その自律的メカニズムが理論的に説明されていないことが指摘される。この問題に対応するために、次章で導入されるのがルーマンの社会システム理論とコミュニケーション概念である。

第 5 章から終章は第三のフェーズに該当するコミュニケーションのオートポイエーシス、すなわち、コミュニケーションがオートロジカルに接続していくメカニズムからのナショナリズムの解明となる。コミュニケーションはシステムであり、システムとは、＜自己（システム）／環境（他者）＞差異化という観察と、そのシステム（自己）への再帰的転写（再参入）オペレーションであるとするルーマンの理論をもとに、ナショナリズム言説再生産の解釈を試みる。すなわち、ナショナリズムの基本的な原理ともいえる、自己集団／他者集団差異化というコードは、オートポイエーシス・システムとしてのコミュニケーション構造の原理そのものに内包されているコードでもある。この視点の転換により、アンダーソンにおける「宿命性と近代」の、マクルーハンによる「身体と技術」の、さらに言えばナショナリズムとグローバリズムの相互作用は、コミュニケーションの自己言及的（自己／他者）差異化運動へと構図を変化させる。その際の、コミュニケーションの方向付けをするいわゆる「象徴的に一般化されたコミュニケーション・メディア」は「ネーション」となる。ある意味極めて大胆な視点の転換であるが、現代社会における情報の動きが、実体という根拠を伴わずともコミュニケーションの自律的な原理で生成・継続していくことを明確に捉えた解釈と考えられる。ネットワーク・パラダイムのもと主客の境界が不分明化する現代のコミュニケーション現象一般を考える際にも、ナショナリズム理論におけるこのような視点の転換が研究の重要な示唆となることを強調して、本論文は結ばれる。